

# 港町宮古の計画史

## 慶長津波からの復興による町割りと港湾開発

### The Planning History of Port Town Miyako

三宅 諭 岩手大学 Satoshi MIYAKE Iwate University

Nanbu feudal clan made much of Miyako as an outpost of Morioka, and the town was developed. Miyako suffered big damage by the massive tsunami in Keicho era. After Keicho tsunami, town block was established for the revival and it was named “Motomachi”. This town block becomes the origin of the frame of current Miyako. After the Meiji era, the shore was filled up for expansion of city area by becoming population increase. Then City area spread, and the model of the current city area was completed.

#### 1. はじめに

岩手県宮古市は岩手県の沿岸中央部に位置し、東は太平洋に面し、三方を北上山地に囲まれ、中央を閉伊川が流れている。平地は少なく総面積の約90%を森林が占めている。集落は閉伊川の河口部付近に形成され、次第に河川沿いに開削されてきた。本格的に宮古の街が形成されるようになったのは、南部藩が宮古を盛岡の外港として重視し、閉伊街道の改修に着手してからである。その後、幾度もの津波、大火、水害、戦災を受けながら、現在に至っている。

#### 2. 盛岡藩の外港・宮古

慶長年間に代官所が置かれ、宮古はこの地方の行政の中心地となった。外洋から奥まった場所に位置しており、外洋の波を遮るために避難港としても機能していること、リアス式海岸による天然の良港であることが大きな要因である。また、ヤマセ等による冷害だけでなく早魃、風水害といった自然災害が多く、盛岡藩では度々凶作に見舞われた。江戸時代265年間に92回の凶作があったと言われている。そのような風土性もあり、南部利直が不來方城に移って城下町の整備を行う際に、城下の発展のためには塩と魚が必要と考えて宮古を外港として重視したと言われている。

#### 3. 慶長大津波と都市骨格の形成

慶長16年(1611)の大津波で宮古は壊滅的な被害を受けたため、元和元年(1615年)に沿岸を訪れた南部利直が町

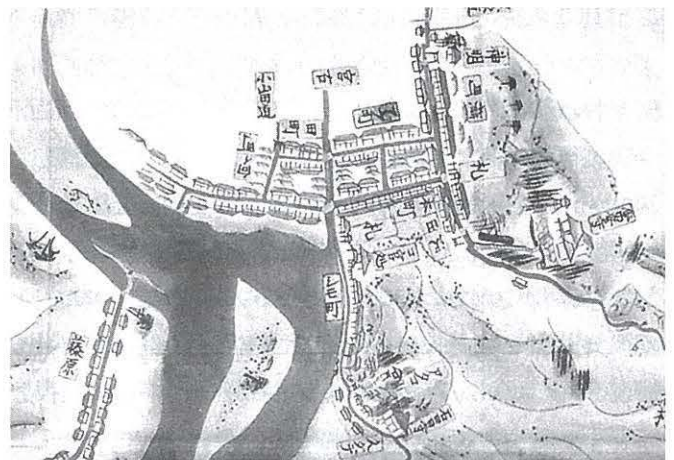


図1 御領分海陸分間図(安靜4年)(盛岡市中央公民館蔵)

割を定め、「本町(もとまち)」と命名した。その後、横町、新町、田町、向町が定められた(図1)。この町割が現在の宮古の骨格の原点となっている。また、この時に藩船の建造配置を定めるなど、商港だけでなく軍港としての計画も立てられている<sup>1) 2)</sup>。

#### 4. 宮古港の整備

明治になると船の大型化と物資の増加に対応するため、地元住民により閉伊川左岸の埋め立て工事が行われた。新川町に運河が開削されるとともに、宮古橋下から光岸地までが埋め立てられ、築地に船着き場が設けられた。また、宮古と鉾ヶ崎との境界が開削されて切通ができていた(図2)。その後、明治45年(1912)には、人口増化による市街地拡大のために新川運河が埋め立てられた。さらに、大正になると

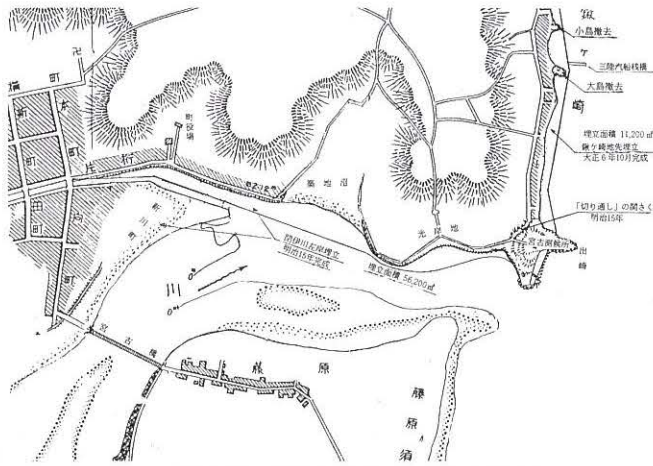


図2 明治初期の修築事業 (出典: 参考文献3)

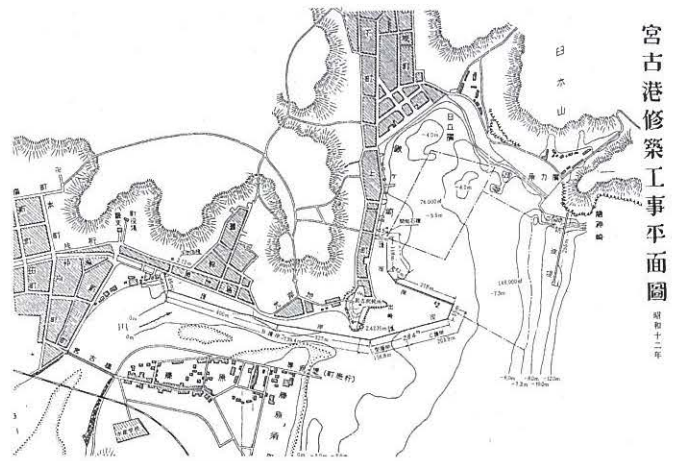


図3 宮古港修築工事平面図 (出典: 参考文献3)

宮古港修築工事平面図  
昭和十二年

大島、小島が取り除かれ、鉾ヶ崎の海岸も埋め立てられて市街地となった<sup>3)</sup>。その後、昭和9年の山田線開通によって市街地が海側ではなく西側へ拡大し、現在の市街地の原型が完成したといえる。

昭和2年に第二種重要港湾に指定されたが、水深2m程度と浅く、大形船舶は沖に停泊して舳船で荷揚を行っていた。また、外洋の波浪の影響も大きく、荷役作業の不利不便が少なくなかった。そのため、昭和4年(1929)に外洋からの波浪を防ぐための防波堤と修築工事が計画された。昭和三陸大津波の影響を受けたが、昭和12年(1937)に埠頭の設置とそれに接続する鉾ヶ崎港内と閉伊川左岸の埋め立て、護岸整備、浚渫といった修築工事が完了した(図3)。この工事で由ヶ尻の洞穴がなくなり、鏡岩の大半が切り崩され、角力浜も埋め立てられるなど、港は大きく変化した<sup>3)</sup>。

その後も出崎埠頭の埋め立て、浚渫、閉伊川右岸に位置する藤原の海岸埋め立て等が行われ、現在の姿となった。

## 5. 自然災害・戦災の影響

### 1) 津波

明治29年の明治三陸大津波では宮古も大きな被害を受けている。一方、昭和8年の大津波では人的被害は少なく、宮古では死者2名であった。「宮古湾内ニ内務省港湾築港工事ニ依リ防波堤工事中ナレドモ其ノ爲メ浪ノ勢力ハ減退シタルモノガ襲来セリ」<sup>4)</sup>と、防波堤によって被害が少なくなったと記録されている。

### 2) 洪水

何回も宮古橋を流失するなどの洪水被害を受けている。戦後もカスリーン台風、アイオン台風による大洪水などがあり、閉伊川の護岸工事が行われた。市街地は山口川も氾濫して大きな被害を受けていたが、現在は川幅も狭くなり、新

町付近から下流は暗渠化されて道路となっている。

### 3) 大火

明治期だけでも、大火は11回記録されている<sup>5)</sup>。閉伊川に沿った西風が、山のふとこで巻くように吹くことと、街が川岸から山裾の狭い範囲に集中しているためである。

### 4) 戦災

昭和20年に空襲を受けている。閉伊川右岸の工場と宮古橋が攻撃目標であった<sup>5)</sup>。閉伊川右岸の藤原地区は全区域焼き尽くされたものの、市街地の被害は少なかった。藤原地区は昭和40年代以降、埠頭建設等の港湾整備が進み、北東北有数の物流拠点となっている。

## 6. おわりに

幾度もの被災から復興してきた宮古市であるが、中心部の骨格は近世の津波被害からの復興を原型としていること、近代化による港湾整備によって市街地が拡大・整備されてきたことを紹介した。近年では道路の拡幅や西側への市街地拡大等はあるものの、大きな骨格の変更は見られない。急峻な山に囲まれた地形条件の制約も市街地形成に影響していたのだろう。

## 参考文献

- 1) 宮古市「宮古のあゆみ」1974年
- 2) 宮古港開港385周年記念事業資料「宮古港のあゆみ」2001年
- 3) 運輸省第二港湾建設局宮古港工事事務所「宮古港工事事務所30年誌」1986年
- 4) 農林省水産局「三陸地方津浪災害豫防調査報告書」1934年
- 5) 花坂蔵之助「ふるさとの想い出写真集 宮古」1979年、国書刊行会